

北駐車場から進むとさまざまな説明坂があった





くに し せき そ ね い せき ぐん ひらばる いせき  
国史跡曾根遺跡群 平原遺跡  
(昭和57年10月指定 平成12年10月追加指定)

～ 平原遺跡の発見から今日まで ～

平原遺跡は1965（昭和40）年1月に前原市宍田の井手勇祐、セツ子、佐藤氏らにより農作業中に偶然発見されました。

その後、福岡県教育委員会を調査主体として平原遺跡調査団が結成され、厳しい寒さのなか、考古学者原田大六先生を中心に多くの市民の協力を得ながら約3ヶ月半に及ぶ調査が行われ遺跡の詳細が明らかとなりました。

昭和57年10月には曾根丘陵上に点在する狐塚古墳、銭瓶塚古墳、ワレ塚古墳とともに曾根遺跡群として国史跡に指定されています。

昭和63～平成11年度にかけて前原市教育委員会が調査範囲を広げて発掘調査を行い遺跡の全容が明らかになりました。

平成12年度には史跡範囲も拡大され現在にいたります。



平原遺跡の発掘調査風景 1998（平成10）年

## ～ 平原遺跡の発見から今日まで ～

平原遺跡は1965（昭和40）年1月に前原市宍田の井手勇裕、セツ子、信英氏らにより農作業中に偶然発見されました。

その後、福岡県教育委員会を調査主体として平原遺跡調査団が結成され、厳しい寒さのなか、考古学者原田大六先生を中心に多くの市民の協力を得ながら約3ヶ月半に及ぶ調査が行われ遺跡の詳細が明らかとなりました。

昭和57年10月には曾根丘陵上に点在する狐塚古墳、銭瓶塚古墳、ワレ塚古墳とともに曾根遺跡群として国史跡に指定されています。

昭和63～平成11年度にかけて前原市教育委員会が調査範囲を広げて発掘調査を行い遺跡の全容が明らかになりました。

平成12年度には史跡範囲も拡大され現在にいたります。





## 国内最多の銅鏡副葬

平原王墓には総数40面の銅鏡が副葬されていました。

中国では、女性の化粧道具の一つにすぎない銅鏡も弥生時代の倭人の王たちにとってはその威信を示す貴重な宝器でした。

弥生時代の北部九州には、大陵や朝鮮半島から多くの銅鏡がもたらされましたが、その多くが伊都国、奴国に集中しています。銅鏡を多量に副葬した墓として知られる上位4墳墓のうち、伊都国の王墓が3墓を占めます。弥生時代の伊都国には強大な権力をもった王が君臨していたことを知ることができます。なかでも平原王墓は、一つの主体部から出土した銅鏡の数としては国内最多を誇ります。



## 世界最大の銅鏡

平原王墓から出土した銅鏡のなかでも同じ型からつくられた5面の内行花文鏡は直径46.5cmに達します。わが国において最大であり、世界にも類を見ない超大型の銅鏡です。

弥生時代～古墳時代前半期にかけて、銅鏡は王の威信を示す最も重要な宝器であり、国内最多、最大の銅鏡を副葬した平原王墓の王は、倭人社会において各地域の王をも凌駕する力を与えられた、まさに王の中の王であったと考えられるのです。

また、内行花文鏡はわが国で生産されたものと推定されています。銅質、鋳上がりも良好で青銅製品として完成度の高いものとされています。伊都国における青銅器の生産技術の高さ、先進性を象徴する金属製品でもあったのです。



## 被葬者は女性

平原王墓から出土した副葬品のうち、銅鏡とともにガラス勾玉、ガラス小玉(約500個)、ガラス管玉、瑪瑙管玉など豊富な装身具が出土しました。

一方、武器としては細身の鉄素環頭大刀一本が出土したにとどまっています。

副葬されたガラス製品のなかから耳璫と呼ばれる女性用のピアスが出土しました。このことから埋葬されたのは女性の王、つまり女王であったと考えられるのです。

## 並び柱群と大柱

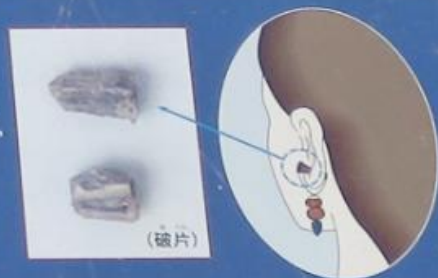
平原王墓の西に二対、北裾に一对の鳥居状の並び柱跡が確認されました。また、王墓の東の地点では直径70cmほどの大柱を埋めた柱穴が確認されています。これらは、葬送の儀礼に際し樹立された柱群と考えられており、対の並び柱は鳥居のような役割をもっていたものと考えられています。

西の並び柱群からは王墓を介して大柱をのぞむことができ、その延長線上には日向峠が位置します。また、北の鳥居からは標高955mの雷山をみることができることから、これらの柱群は、この山並みを強く意識して建てられたものと推測されます。

## ガラス耳璫

現在のピアスと同じもの。漢の時代、貴族の女性が身につけていた。

日本でただひとつの発見例。





ひらばる いせき がいよう  
**平原遺跡の概要**

平原遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓遺跡です。  
 史跡地内には1号墓（王墓）をはじめ5基の墳墓が保存されています。

1号墓

平原遺跡の中心となる墓で弥生後期末（2世紀後半）に築かれました。墓は東西14m、南北11mの長方形の墳丘を周溝が囲んでいます。墳丘中腹部に東西方向に主軸を向けた4.6m×3.5mの墓壇を掘り、長さ3m、幅82cmほどの割竹形木棺が納められていました。木棺の内外から総数40面に達する破砕された銅鏡、鉄索環頭大刀、豊富な装身具などが出土しています。



1号墓

2号墓

1号墓の南西に築かれた東西長7mほどの隅丸方形の墳墓で中央に舟形木棺の埋葬痕跡が残っていました。副葬遺物はないが周溝および周溝周辺で出土した土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に築かれたものと考えられます。



2号墓

3号墓

1号墓の東に築かれた径6.3～6.4mの円墳で、主体部は不明ですが中央付近から刀子1本が、周溝から赤石製白玉、ガラス小玉、鉄鏃、土師器が出土しました。出土した土師器から古墳時代前期前半の墓と考えられます。

4号墓

3号墓の南西部に築かれた径5mほどの円墳で、中央部から土師器が出土しましたが副葬品は発見されませんでした。

5号墓

隅丸方形プランの墳墓で、5.6m×5.2mの規模を有します。墳丘裾から弥生後期初頭の小児を埋葬した土器棺が出土しました。墓群中最古の墓です。付近では2面分の銅鏡(前漢鏡)片が採集されており、この墓に副葬されていた可能性が高いと考えられます。



5号墓



5号墓出土小児用埴輪墓



5号墓周辺から出土した前漢鏡片

異形建物

大柱

2号墓



大柱の痕跡

3号墓

4号墓

1号墓

大柱2

5号墓

大柱1



3,4号墓

平原遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓遺跡です。

史跡地内には1号墓（王墓）をはじめ5基の墳墓が保存されています。

#### 1号墓

平原遺跡の中心となる墓で弥生後期終末（2世紀後半）に築かれました。墓は東西14m、南北11mの長方形の墳丘を周溝が囲んでいます。墳丘中央部に東西方向に主軸を向けた4.6m×3.5mの墓壇を掘り、長さ3m、幅82cmほどの割竹形木棺が納められていました。木棺の内外から総数40面に達する破砕された銅鏡、鉄素環頭大刀、豊富な装身具などが出土しています。

#### 2号墓

1号墓の南西に築かれた東西長7mほどの隅丸方形の墳墓で中央に舟形木棺の埋葬痕跡が残っていました。副葬遺物はないが周溝および周溝周辺で出土した土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に築かれたものと考えられます。

#### 3号墓

1号墓の東に築かれた径6.3～6.4mの円墳で、主体部は不明ですが中央付近から刀子1本が、周溝から滑石製白玉、ガラス小玉、鉄鏃、土師器が出土しました。出土した土師器から古墳時代前期前半の墓と考えられます。

#### 4号墓

3号墓の南西部に築かれた径5mほどの円墳で、中央部から土壇墓を検出しましたが副葬品は発見されませんでした。

#### 5号墓

隅丸方形プランの墳丘墓で、5.6m×5.2mの規模を有します。墳丘裾から弥生後期初頭の小児を埋葬した土器棺が出土しました。墓群中最古の墓です。付近では2面分の銅鏡(前漢鏡)片が採集されており、この墓に副葬されていた可能性が高いと考えられます。



1号墓



2号墓

異形建物

大柱

2号墓

1号墓

4号墓

3号墓

大柱2

5号墓

大柱1



大柱の痕跡



5号墓



5号墓出土小児用甕棺墓



3,4号墓

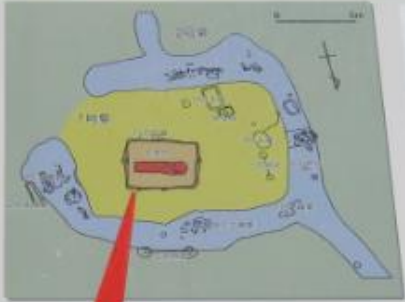


5号墓周辺から出土した前漢鏡片



# ◆◆◆◆◆ 平原1号墓の構造 ◆◆◆◆◆

1号墓の墳丘中央部に東西長4.6m、南北幅3.5mの墓壇が掘られ、王は内面に赤く朱を塗った割竹形木棺（大木を割り貫いた木棺）の中に頭位を西に向けて安置されていました。胸には青いガラス製の勾玉を身につけ、傍らからはガラス小玉が出土しました。また、棺の内外から計40面の破砕された銅鏡、鉄素環頭大刀、耳環、瑪瑙管玉が出土しています。出土した副葬品などは一括して国宝に指定されています。



国宝 鉄素環頭大刀



国宝 内行花大鏡



国宝 内行花大鏡



国宝 内行花大鏡



国宝 四輪鏡



国宝 方格規矩鏡



国宝 方格規矩鏡



国宝 方格規矩鏡



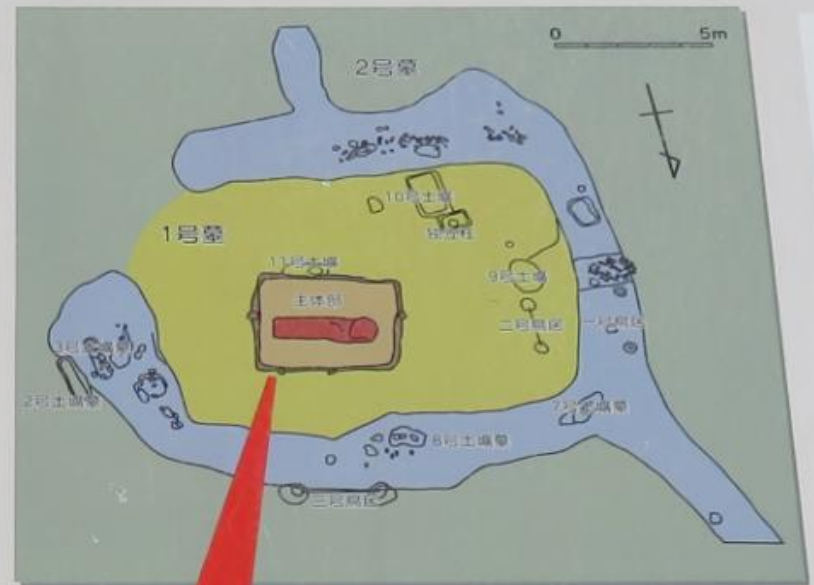
国宝 ガラス勾玉



国宝 ガラス小玉

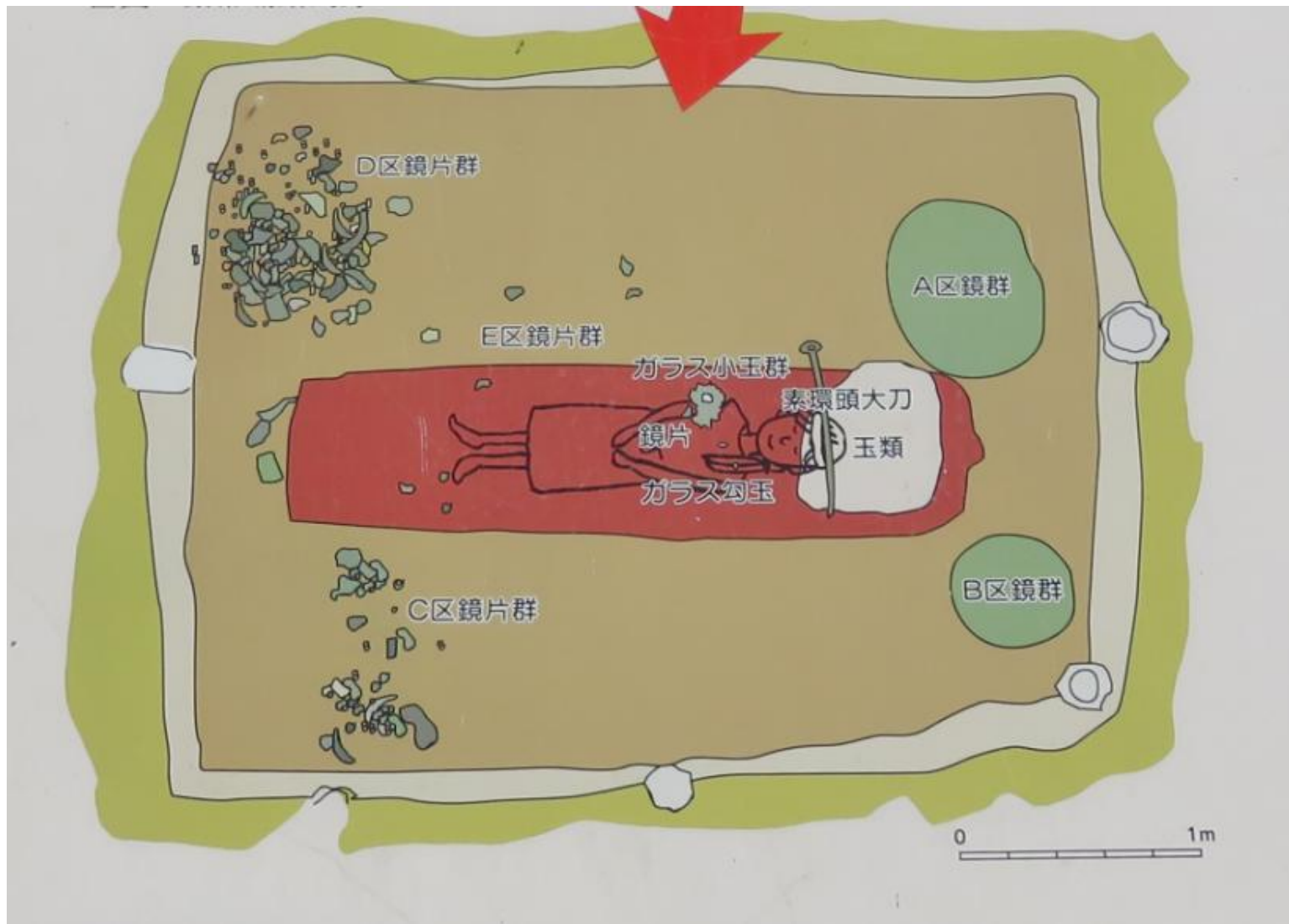
1号墓の墳丘中央部に東西長4.6m、南北幅3.5mの墓壇が掘られ、王は内面に赤く朱を塗った割竹形木棺（大木を刳り貫いた木棺）の中に頭位を西に向けて安置されていました。胸には青いガラス製の勾玉を身につけ、傍らからはガラス小玉が出土しました。また、棺の内外から計40面の破砕された銅鏡、鉄素環頭大刀、耳瑠、瑪瑙管玉が出土しています。

出土した副葬品などは一括して国宝に指定されています。



国宝 鉄素環頭大刀







こちらにもさまざまな説明坂がある





文化財マップ



① 美作平家朝倉の墓



④ 大光院の滝



② 雲山神社の心霊樹



⑤ 新羅殿



③ 雲山の観音経



⑥ 加帝美山元



⑦ 常陸神馬











弥生時代の入江



志谷支石墓群 国指定史跡  
Shiro Daimens

支石墓10基のうち8号支石墓には4本の朝鮮系磨製石鏃が副葬されていた。東西に入江を隔てる立地から、弥生時代黎明期以来、先進的な文化がいち早く受容された遺跡であるといえる。



石ヶ崎支石墓  
Ishigasaki Daimen

昭和24(1949)年の調査により支石墓1基、裏棺墓29基、土壇墓3基を発見。早期から前期の支石墓の上石は3.2 x 2.8mの巨石で、12個の朝鮮系磨玉製大型管玉が副葬されていた。



井田用会支石墓  
Itoyoushi Daimen

3.5 x 3m、厚さ37cmと国内屈指の大きさを誇る上石を持つ。副葬品として磨玉製管玉22個が出土している。現在、上石は南側に位置する三所神社内に移設されている。



新町支石墓 国指定史跡  
Shinmachi Daimen

早期および前期の支石墓群。24号墓の熟年男性は朝鮮系磨製石鏃を射込まれて死亡していた。現時点で最古の戦死者である。人骨の形態は渡来系ではなく縄文系であり、文化受容に現地の人々が深く関与したことがわかる。またそれぞれの支石墓には、当時の高水準な造形感覚をうかがわせる丹塗り漆喰を施した小童が副葬されていた。

支石墓

支石墓は、弥生時代の始まりとともに朝鮮半島南岸から伝わり、糸島・津津を中心とする北部九州に集中的に分佈する。支石墓から出土した数々の副葬品はまさに朝鮮半島への交流の証であり、糸島地域の人々がいち早く大陸文化を受け入れたことを物語る。この先進性こそが所産性を生み出し、後の伊都国王を培う基盤となった。



銅剣出土状況



銅剣・銅矛

久米遺跡(国史跡)  
Kusumi Site

中期前半の環状墓2基から細形銅剣および細形銅矛が出土。この時期、野北・久米一帯を治めた人物らの墓と思われ、朝鮮半島などとの交易を活発に展開していたことを物語っている。

写真提供：国史跡久米遺跡 久米遺跡・久米川銅剣 久米遺跡・久米川銅矛



赤崎銅剣



西古川銅剣(二式)



西古川銅矛

階層分化社会へ  
青銅器の出現

弥生時代中期には、各小平野や河川流域を単位として社会的発展を遂げ、地域によっては墳墓に朝鮮半島製の青銅器を副葬するようになる。王都誕生前後の、まさに群雄割拠の時代である。この後、生産力・交易力が次第に統括され、三春・井原を中心とした対外交渉の拠点「伊都国」の全盛へとつながってゆく。



伊都国以前  
Before Ito-Koku  
弥生時代早期〜中期





弥生時代中期後葉〜後期

# 王都の繁栄

Prosperity of Ito-kingdom

三雲・井原遺跡



この地はかつての伊都国王都で、面積は約60haを誇る。その一角には歴代の王や有力者が眠る墓地がある。「魏志倭人伝」に記された国の都は王の墓が確定している唯一の地でもある。弥生時代中期以後、伊都国はわが国における国際交流の拠点となり、先進文化受容の窓口としての役割を担った。出土する数々の国内各地の土器や国際色豊かな考古資料が、当時の伊都国の突出した繁栄の様子を今に伝えている。

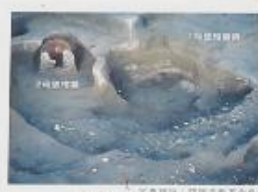
## 魏志倭人伝

中国の歴史が著した歴史書で、3世紀のわが国の地理や風物等を記す第一級の資料である。その中で伊都国関連の記述は非常に多く、取扱いが別格である。「歴代の王の存在」、「王宮と複数の別宮の存在」、「中国の郡侯が往来、滞在する地である」、「魏国を称する一大軍が置かれた」との記述に伊都国の特殊性があらわれている。



伊都国王都の様子

弥生時代中期後葉、伊都国は畿内・近畿地方に次ぐ大規模な集落を形成し、独自の文化を築いていく。その中心地として、三雲・井原遺跡が繁栄する。この遺跡からは、土器、銅器、ガラス玉など、国内各地から運ばれたさまざまな品が発見された。また、この遺跡からは、弥生時代中期後葉の伊都国が、先進文化を受容する窓口としての役割を担っていたことが明らかになった。



主体部出土状況



墳丘規模想定図



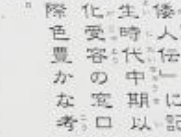
銅鏡・銅文の図



重圓流文帯「精白」銅鏡



金銅製四葉文金具



ガラス玉

## 三雲南小路王墓

伊都国初代の王（1号埋葬墓）と王妃（2号埋葬墓）が眠る、平面で32×31m、高さ約2mと当時では特大の墳丘だったと推定される。副葬された遺物は骨・量ともに他の墳墓を凌駕する。なかで唯一ひとつの墳墓から577面以上出土した銅鏡の存在が、最高位にある伊都国王の絶大なる象徴している。



銅鏡片



巴形銅器



銅鏡・ガラス玉

## 井原鍵溝王墓と王族墓

『柳園古器略考』には井原村鍵溝にあった墓からおびただしい方格規距鏡や巴形銅器等発見時の聞き書きが記載されており、その状況から歴代伊都国王のひとりと推定されているが、不明な部分が多く謎に包まれている。平成16年度の調査で、木棺墓・甕棺墓等30基を超えるの墓群を発見。副葬品である後漢鏡3面（方格規距四神鏡1・内行花文鏡2）や合計7,000個を超えるガラス玉の出土から、王族あるいは有力者の墓と考えられる。

## 〜外來品の考古資料〜



地中海系 ブライアンス玉



中国産 鑄造鉄斧



瀬戸内系土器



東海系土器

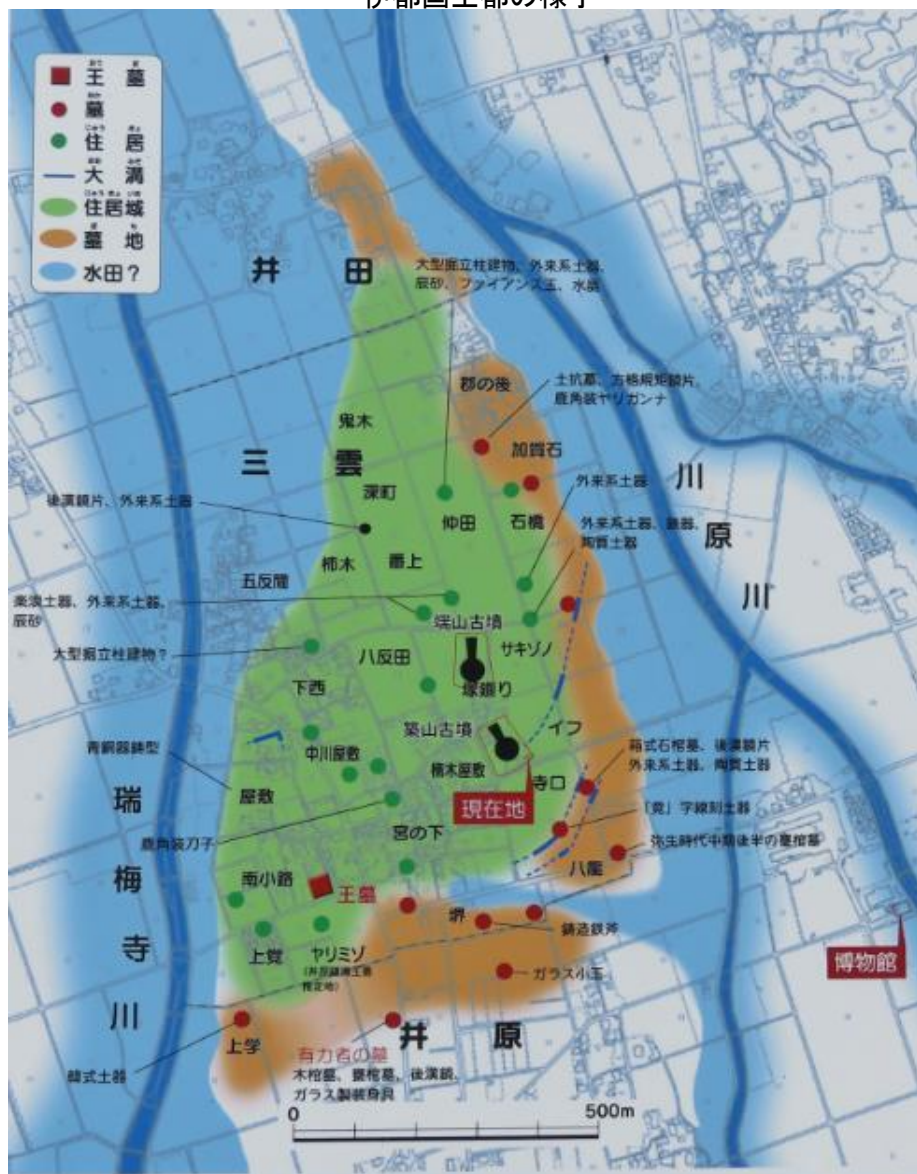


## 青柳種信の功績

江戸時代・真田藩の国学者。本名長に跡継ぎ。『筑前国統原土記附録』や『後漢宮印考』などを著している。『柳園古器略考』では三雲南小路遺跡発見の経緯や副葬品の出土状況と解説を記し、また井原鍵溝での銅鏡等の発見の様子とそれらの拓本を掲載するなど、その観察力と記述の正確性は、二百年を経た現在でも大きな価値をもつ。



# 伊都国王都の様子



古墳時代〜奈良時代

# 伊都国のその後

After that of Ito-Koku

ヤマト王権の幕開け、古墳時代を象徴する前方後円墳、中央とのつながりを示す古墳で、糸島には大小約60基以上と高密度に分布する。奈良時代以後も、対外交流と国防の最前線として重要な役割を果たした。



## 雷山神護石(7世紀)

雷山中腹(標高400~480m)に位置する、東西300m、南北700mの古代山城。朝廷補佐城防衛を目的に7世紀中葉に築造されたとされる。遺構としては各所に設けられた北水門・南水門と、東西に派生する列石をもつ土塁が残る。



## 怡土城跡(8世紀)

高祖山の古刹首一帯(高祖・大門・堂未寺地区)に築かれた古代山城。新羅との関係強化を受け、大宇大武であった古倭真備らの指揮の下、西暦756年から12年間を要して築城された。当時の国防拠点のひとつで、全長2kmに及ぶ土塁・石塁のほか、望楼・城門・水門を湛などの跡が確認されている。



主要古墳分布状況図



## 端山・築山古墳(4世紀)

4世紀前後築造の端山古墳は全長78.5m、4世紀末築造の築山古墳は全長約60mである。両古墳とも周壕が巡る前方後円墳であるが、主体部は未調査である。本来は端山古墳の東に七茶臼山古墳(前方後円墳)があり、古墳時代前期七女お継統してヤマト王権から重要視されていたことがみとれる。



## 全塚古墳(5世紀前葉)

墳丘直径約56m、周溝および外堤を含め約89mと、西日本屈指の大型円墳。周溝内からは近畿以外で初めて、髷よけのための祭具である石見型木製品(長さ約2m)が出土。この一帯が朝鮮半島とヤマト王権を結ぶ重要な地域であったことがわかる。



## 狐塚古墳(5世紀前葉)

墳丘直径約37m、周壕を含めると径約48mの大型円墳。3段築成。竪穴式石室と初期の横穴式石室をもつがいずれも盗掘により著しく破壊されていた。



## 銭瓶塚古墳(5世紀中葉)

全長50m(後円部径約37m、前方部長約13m)、周壕が巡る帆立貝形前方後円墳。家形埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか、珍しい岩偶が出土している。岩偶は、歯をむき出しにしており、古墳を守る髷よけと考えられる。



## ワレ塚古墳(5世紀後葉)

全長42m(後円部径約30m、前方部長約12m)の帆立貝形前方後円墳。円筒埴輪が立ち並び、周壕からは馬形埴輪が出土しており、墓前祭祀の状況を示す貴重な遺跡である。



主要古墳分布現況図







はやま つきやま こふん  
**端山・築山古墳(4世紀)**

Hayama・Tsukiyama Burial Mound

4世紀前後築造の端山古墳は全長78.5m、  
 4世紀末築造の築山古墳は全長約60mであ  
 る。両古墳とも周壕が巡る前方後円墳であ  
 るが、主体部は未調査である。本来は端山  
 古墳の東にも茶臼山古墳(前方後円墳)が  
 あり、古墳時代前期もなお継続してヤマト  
 王権から重要視されていたことがみてとれ  
 る。



かまつか こふん 国指定史跡  
釜塚古墳(5世紀前葉)

Kamatsuka Burial Mound

墳丘直径約56m、周溝および外堤を含め  
約89mと、西日本屈指の大型円墳。周溝  
内からは近畿以外で初めて、魔よけのため  
の祭具である石見型木製品(長さ約2m)  
が出土。この一帯が朝鮮半島とヤマト王権  
を結ぶ重要な地域であったことがわかる。



ぎつねづか こふん

国指定史跡

## 狐塚古墳(5世紀前葉)

Kitsunezuka Burial Mound

墳丘直径約33m、周壕を含めると径  
約48mの大型円墳。3段築成。ちくせい 竪穴式  
たてあなしき  
せきしつ 石室と初期の横穴式石室をもつがいず  
よこあなしきせきしつ  
とうくつ れも盗掘により著しく破壊されていた。  
いちじる はかい





国指定史跡  
ぜにがめづか こふん  
**銭瓶塚古墳 (5世紀中葉)**  
Zenigamezuka Burial Mound

全長50m (後円部<sup>こうえんぶ</sup>径約37m、前方  
部長約13m)、周壕<sup>しゅうごう</sup>が巡る帆立貝形<sup>ほたてがいがた</sup>前方<sup>ぜん</sup>  
後円墳<sup>ほうこうえんぶん</sup>。家形埴輪<sup>いえかた はにわ</sup>・円筒埴輪<sup>えんとう はにわ</sup>・  
朝顔形埴輪<sup>あさがおがた はにわ</sup>のほか、珍しい岩偶<sup>いんぐう</sup>が  
出土している。岩偶は、歯をむき出  
しにしており、古墳を守る魔よけと  
考えられる。



づか こふん 国指定史跡  
ワレ塚古墳 (5世紀後葉)  
Warezuka Burial Mound

全長42m (後円部径約30m、前方部長約12m) の帆立貝形前方後円墳。円筒埴輪が立ち並び、周壕からは馬形埴輪が出土しており、墓前祭祀の状況を今に伝える貴重な遺跡である。

さて、平原1号墓の方向へ進むと説明坂が立っている/中央前方に見える墳丘が平原1号墓





## 平原弥生古墳

ここはかつて塚畑と呼ばれていました。

井手信英さんが農作業中に、突然、多量の銅鏡片などが出土。一九六五年（昭和四十年）一月の事でした。さつそく二月～五月にかけて前原在住の考古学者原田大六氏を調査主任として発掘調査が進められました。

驚きの発見の中で、特に注目を集めたのが、三十九面にのぼる銅鏡群でした。さらに、日本最大の白銅鏡については、原田大六氏は伊勢神宮の御神体である八咫鏡と考察されました。それは、後漢尺で測ると直径二尺（四十六・五センチ）、その周囲は八咫（百四十五センチ）の寸法を持っていること。さらに『延喜式』や『皇大神宮儀式帳』に記された八咫鏡を納めた「桶代」の寸法が平原大鏡の径に近いこと、『御鎮座伝記』記載の鏡の特徴が「八頭花崎八葉形也」から平原大鏡こそ伊勢神宮の『八咫鏡』と同型鏡であると結論づけられました。

さらに、原田大六氏は墓の副葬品に武器が少ないこと、装身具が多いことなどから被葬者を女性と推定され、そして、鏡・大刀・勾玉という『三種の神器』が副葬されていたことから『天照大神』（神格名・大日靈貴）の墓であると確信されました。

伊都国こそ『天皇の故郷』とする原田大六説の論拠は、ここ平原弥生古墳で見つかった『三種の神器』が東遷して大和に至ったと推測されたものです。

なお、この遺跡の発掘調査報告書は、原田大六著『平原弥生古墳 大日靈貴の墓』として発行されています。

標柱には「史跡曾根遺跡群 平原遺跡」と記されている/左手前方に平原1号墓の墳丘が見える





正面が平原1号墓/北側から見たところ





説明坂がある/北西側から見たところ



# 国指定史跡 曾根遺跡群 平原遺跡

1982 (昭和57)年 10月4日指定、  
2000 (平成12)年 9月6日追加指定

1965 (昭和40)年と1988 (昭和63)～1999 (平成11)年に発掘調査され、弥生時代中期初頭の<sup>たてあな</sup>竪穴住居跡7棟、<sup>つばかんぼ</sup>壺棺墓1基・<sup>もっかんぼ</sup>木棺墓4基、弥生時代後期の<sup>おほほしら</sup>墳丘墓3基・<sup>おほほしら</sup>大柱遺構3基・特殊建物跡1棟・古墳時代前期の<sup>おほほしら</sup>円墳2基・<sup>どこうぼ</sup>土壙墓12基・時期不詳の掘立柱建物3棟などが発見された。

このうち、弥生時代終末期の1号墓は14m×10.5mの長方形状の平面形で、幅1.5m～3.0mの周溝で区画し、排水溝を持った墓である。主体部である広さ4.5m×3.5mの<sup>ほこう</sup>墓壙中央には、長さ3.0m、幅0.7m～0.9mの<sup>わりたけがた</sup>割竹形の本棺1基が納められていた。棺の内外から銅鏡40面、ガラス<sup>まがたま</sup>勾玉3点・<sup>くたたま</sup>管玉30点以上・<sup>れんたま</sup>連玉886点・丸玉約500点・小玉482点、メノウ管玉12点、ガラス<sup>じどう</sup>耳環2点、<sup>すいざんしゆ</sup>水銀朱、<sup>そかんどう</sup>鉄製素環頭大刀1本などが出土した。

特に直径46.5cmの古代で世界最大の超大型内行花文鏡5面を含む銅鏡などの豊富な副葬品から、1号墓は<sup>みこ</sup>巫女的な性格をもった伊都国の女王墓と推定される。

なお、超大型内行花文鏡を<sup>やたのかげ</sup>八咫鏡として、「日本書紀」などにみられる<sup>おほひるめのみむす</sup>大日靈貴の墓と考える原田大六先生の説がある。



平原遺跡の発掘調査風景  
(昭和40年当時 西日本新聞社提供)



1号墓の左上の丸が二つ重なった所が3~4号墓



5号墓が墓群中最古(弥生後期初頭)の墓と云う





西側から見たところ/弥生後期終末(2世紀後半)の築造と云う



東側から見たところ/被葬者は女性ではないかと云う





こちらは出土した鏡を表示したモニュメント







こんな塩梅



さて、北駐車場の近くに古民家があった





説明坂がある



# 旧藤瀬家住宅

(糸島市指定文化財)

この建物は、平成十二年まで市内神在の藤瀬家住宅として使用されていましたが、藤瀬家は江戸時代中津藩神在組の大庄屋職を務めた旧家です。解体に伴う調査の結果、元文二（一七三七）年に建てられたことがわかりました。建築年が明らか

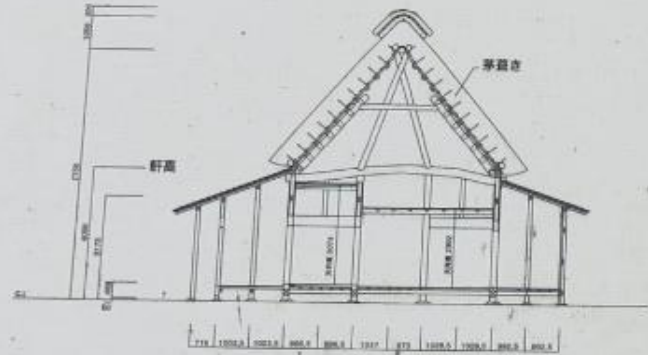
な民家としては九州で最古期のものです。主屋は南を正面として建ち、屋根は寄棟造茅葺です。直屋形式の上屋は梁間三間、桁行五間で、前後に瓦葺の下屋を架け下ろしています。間取りは土間に面した広間を中心とした広間型に分類できます。床の間を備えた座敷のかわりに、公的な儀礼の場には使用されたと考えられる大きな玄関風の空間を有している点に、大庄屋宅ならではの風格を感じさせます。

外観は茅葺の上屋に瓦葺の下屋を付すなど、西日本の民家に見られる先進的な姿を示している点も、広間の飾り柱として利用された押板や腰高の格子窓を設けるなど東日本の古い民家に見られる特徴を備えている点が大きな特徴です。

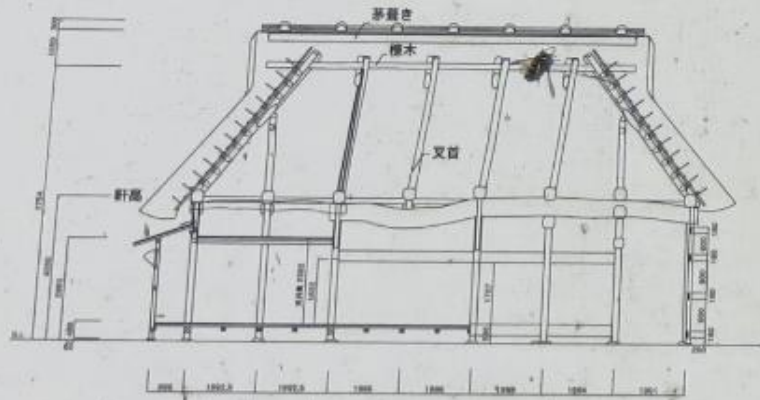
江戸時代中期の民家として建築史、生活上でも重要であることから、平成十七年度の平原遺跡環境整備事業に併せてこの地に移築し、建築当初の姿に復原しました。長く後世に伝えたい貴重な文化遺産です。大切にしましょう。

糸島市教育委員会

■旧藤瀬家 南北 断面詳細図



■旧藤瀬家 東西 断面詳細図





参考ホームページ

<http://www.city.itoshima.lg.jp/s033/010/020/010/110/010/hirabaru-iseki.html>

<https://y-ta.net/hirabaru-iseki/>

<http://inoues.net/ruins/itokoku.html>

<https://4travel.jp/travelogue/11178445>

<https://www.nagaitoshiya.com/ja/2010/queen-himiko-tomb-hirabaru/>

<https://kodaishi.net/kofun/hirabaru>

<https://www.travel.co.jp/guide/article/27333/>

[http://piq.life/ito\\_paradise/article/662](http://piq.life/ito_paradise/article/662)

<http://tokyox.matrix.jp/wordpress/%E7%B3%B8%E5%B3%B6%E9%83%A1%E3%81%AE%E5%B9%B3%E5%8E%9F%E9%81%BA%E8%B7%A1%E3%80%81/>

<http://kofunmeguriwalking.web.fc2.com/hirabaruiseki.html>

<https://ameblo.jp/indyaki12/entry-12317981917.html>

